



Title	中国人日本語教室学習者の日本語談話におけるフィルターの使用に関する一考察：第二言語環境習得と外国語環境習得の違いに注目して
Author(s)	冷, 羽涵
Citation	阪大日本語研究. 2024, 36, p. 91-115
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94778
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国人日本語教室学習者の日本語談話におけるフィラーの 使用に関する一考察 第二言語環境習得と外国語環境習得の違いに注目して

A study on the use of fillers in Japanese discourse by Chinese learners of
Japanese in the classroom :
Focusing on the differences between second language acquisition and
foreign language acquisition

冷羽涵
LENG Yuhan

キーワード：中国人日本語教室学習者、第二言語環境習得、外国語環境習得、初対面談話、中国語フィラー

要旨

本稿は、中国人日本語教室学習者 10 名を対象に、初対面の日本語母語話者との自由談話を用い、第二言語環境習得（以下、JSL）と外国語環境習得（以下、JFL）の違いがフィラーの使用に影響するかどうかについて考察を試みる。その結果、次のことが明らかになった。

(a) フィラー全体の使用回数については、JSL 学習者と JFL 学習者とで相違がない。その理由は、今回の調査対象者がいずれも「教室指導環境」で日本語を学んだことにあると思われる。

(b) 日本語フィラーの使用回数については両グループに違いがあり、JSL 学習者は JFL 学習者より有意に多かった。その形式面についても、音声型フィラーの使用率は JFL 学習者のほうが JSL 学習者よりも大幅に高い一方、語彙型フィラーの使用率は JSL 学習者のほうが JFL 学習者より顕著に高かった。JSL 学習者と JFL 学習者とでこのような相違が見られた要因として、日本人や自然な日本語との接触の多寡が考えられる。

(c) 中国語フィラーの使用についても両グループで違いがあり、JFL 学習者にしか見られなかった。使用された中では音声型フィラーの使用率が非常に高く、「e(ー)」の使用は全員に見られた。JFL 学習者のみに中国語フィラーの使用が見られた要因として、社会的要因（①日々の発話環境が中国語環境である、②談話において中国語の使用が許容される）と、言語的要因（③両言語の発話の中の類似する位置に現れる、④言語転移の可能性）がある。これらの要因の中では、社会的要因のほうが言語的要因より強く働いている。

1. はじめに

本稿は、中国でのみ日本語を習った中国人日本語学習者と、日本でのみ日本語を学んだ中国人日本語学習者とで、フィラー（詳細は 3.2 節で述べる）の使用に相違があるかどうかを考察するものである。言葉は、私たちの思考や感情を表現するための力強いツールである。しかし、

それを表現する過程では、時に迷いや躊躇が生じ、「えっと」「あのう」のような形式（フィラー）を使うことがある。以下は、本研究で収録した日本語母語話者の談話の中の例である。数字は発話文番号を表す。記号は 3.1 に示した話者 ID である。

(1) 卒業論文の結果について

- 535-1 CN あの一、私は弟と妹がいますが、えっと、この兄弟 3 人で、
536 C1 はい。
→ 535-2 CN その特撮を見て、あの一、3 人でその同じような真似をするんですよ、
537 C1 ふん<笑いながら>。
535-3 CN その戦隊のヒーローみたいな。

下線部のような形式は、生起環境が統語的に制限されておらず、実質的な意味が希薄であるため、削除されても発話文全体の意味がほぼ変わらないと思われる。このような形式は、フォーマルな談話場面で顕著に現れ、聞き手への配慮といった役割を果たすため、実際のコミュニケーションにおいては重要であるとされているが（山根 2002、Iwasaki 2011 など）、それを教授対象の言語項目として日本語教育で取り扱うことがほとんどないのが現状である。

そこで、本稿では、「教室指導環境」で日本語を学んだ中国人日本語学習者（以下、中国人学習者という）を対象として、初対面の日本語母語話者（以下、母語話者とする）との日本語での自由談話を収録し、日本人や日本語との接触度の異なる、第二言語環境での日本語習得（以下 JSL ((Acquisition of) Japanese as a Second Language) と外国語環境での日本語習得（以下 JFL ((Acquisition of) Japanese as a Foreign Language) との違いがフィラーの使用に影響を与えるかどうかを調査する。なお、本稿で使用する「学習環境」「第二言語環境」「外国語環境」という用語については以下のように定義する。

学習環境：学習者が学習する際の多様な物理的場所、文脈、文化の全般を表す。第二言語習得研究においては「学習環境」を、「第二言語環境」と「外国語環境」、「教室指導環境」と「自然習得環境」に分けることが多いが、本稿では後者を「教室指導環境」に統一し、前者の違いに注目する。

「第二言語環境」：日常の居住空間で目標言語が日常的に使用される環境

「外国語環境」：日常の居住空間で目標言語が日常的に使用されない環境

なお、「第二言語環境」と「外国語環境」はごく大まかに分類したもので、個々の学習者が実際に置かれている環境は多様である。

本稿の構成は以下の通りである。まず、2 節において先行研究を整理した後、問題のありか

を提示する。続く3節では調査の概要と分析の枠組みを、4節では調査結果を示す。5節において考察を行い、6節においてまとめと今後の課題について述べる。

2. 先行研究と問題のありか

本稿では、JSLとJFLの違いによって、フィラーの使用に差が見られるかどうかを明らかにしたい。本節においては、まず、2.1で日本語習得と学習環境の相関に関する研究を概観する。次に、2.2で日本語のフィラーの習得と学習環境に関わる研究を整理する。続いて、2.3では問題のありかを示し、2.4では本研究の目的を提示する。

2.1. 日本語習得と学習環境の相関

1990年代以来、JSLとJFLの違いと日本語の習得との関連性について、多くの研究で追求されてきた。その結果には、①両者に違いが見られたとする研究（許1997、王2018、津留崎他1997、迫田・細井2018等）もあれば、②両者にはあまり差がないと報告している事例（稲葉1991、鎌田1993、田中1996）もある。その他、③言語項目や各項目の用法によって両者に相違が見受けられるとする研究（孫2008a、b、村田2020、迫田・細井2020等）も存在する。以下、それらを順に見ていく。

まず、①JSLとJFLで日本語の習得のあり方に違いが見られたとする研究を整理する。許(1997)は、中国語を母語とする中上級レベルの学習者を対象に「テイル」の使用状況を絵画ストーリーテストおよび文法テストを行って分析した結果、JSL²⁾(日本で日本語を学ぶ)学習者はJFL(台湾で学ぶ)学習者より正答率が高いことを明らかにした。王(2018)は、中国語を母語とする日本語学習者を対象に、多義語の「あがる」「みる」の産出と受容についてアンケート調査を実施し、考察を行った。その結果、JFL(中国の大学で学ぶ)学習者の多義語の産出は、母語話者とも、JSL(日本の大学に留学している)学習者とも異なることが分かった。その理由は、JFL学習者は教科書に影響されやすいからであるとしている。また、多義語の受容では、JFLよりJSL学習者のほうが母語話者の認識に近いことから、JSLは多義語の習得を促進すると述べている。津留崎他(1997)は、予測文法を解明するため、後続文の文完成テストによって考察した結果、JFL(香港大学で学ぶ)学習者は未習項目についての予測が困難になり、予測文の長さに関して、JSL(日本の大学や語学学校で学ぶ)学習者ほど長くないことが分かった。迫田・細井(2018)は、I-JAS学習者コーパス³⁾の「依頼」ロールプレイの発話を資料とし、「あの一、ご相談があるんですが…(迫田・細井2018:144)」のような会話の切り出し部分(開始部)と、それ以外のところで依頼を行う部分(依頼部)における中途終了文の使用状況を分析した。そ

の結果、使用頻度において、開始部と依頼部では、JSL（日本の日本語教育機関で学ぶ）学習者はJFL（自国の日本語教育機関で学ぶ）学習者より有意に多かったことが分かった。

一方、② JSL と JFL の違いが見られなかったと報告している研究には、次のようなものがある。英語を母語とする中級レベルの学習者を対象に「ト・バ・タラ・ナラ」の条件表現の使用を文法性判断テストによって調査した稲葉（1991）では、JSL と JFL の違いによる差が見られないとされている。また、伝達表現をインタビューで調査した鎌田（1993）と、来日直後と来日1年後の学習者の受け身の習得について調査した田中（1996）でも、JSL か JFL かによる使用上の差異があまりないと述べられている。

他方、③ JSL と JFL の違いの与える影響は言語項目や各項目の用法によって異なることがあるとする研究は、次のようなものである。村田（2020）⁴⁾ は、I-JAS 学習者コーパスのデータを用い、会話の中に現れる「のだ→んだ」や「いろいろな→いろんな」のような16の音声転訛を環境別に考察した結果、環境による差が見られる形式もあれば、そうでない形式もあることを明らかにした。また、迫田・細井（2020）では、I-JAS 学習者コーパスにおけるストーリーテリングのデータを資料とし、「正確さ」と「複雑さ」の観点から学習環境と言語使用の相関関係について計量的に分析された。その結果、JSL-C（来日後、教室で日本語を学ぶ）群は、JFL（自国で日本語を学ぶ）群とあまり違いが見られなかった。しかし、JFL 群に比べ、JSL-C 群は並列節を用い、長い文を生成する傾向にあることも指摘している。他方、調査対象や調査方法が異なり、直接に比較することはできないが、同じ授受表現を調査項目として扱っている田中（1997）と尹（2006）とでは違う結果が出ている。田中（1997）は、文生成テストを行い、結果として JSL と JFL の違いによる授受表現の使用に差異がないとしている。それに対し、絵画ストーリーテストによって調査した尹（2006）では、JFL より JSL 学習者のほうが「テアゲル」の習得が進むとされている。さらに、台湾人学習者を対象に三肢選択の質問紙によって指示詞の使用を考察した孫（2008a, b）では、指示詞の用法によって JSL（日本に留学後、正式に学習を開始したグループ）と JFL（台湾の大学で学ぶグループ）の結果が分かれている。非現場指示用法において、下位レベルの学習者には JSL と JFL の間に有意差が認められなかったが、上位レベルの学習者には差が見られ、JSL のほうが指示詞の習得を促進する（孫 2008b）。それに対して、現場指示用法においては、「独立的現場指示のコ」と「相対的現場指示の対立型のコ」以外は、日本語のレベルと関係なく、JSL は JFL より習得が進むとしている（孫 2008a）。

2.2. 日本語のフィラーの習得と学習環境

次に、日本語学習者のフィラーの習得を分析した研究を整理する。

学習者のフィラーの習得を扱った研究では、学習者と母語話者との、フィラー使用のあり方の異同に焦点を当てた研究が多い。たとえば永井（2017）は、韓国人・中国人（JSL か JFL かは不明）学習者 4 名を対象に談話調査によって学習者と母語話者のフィラー使用の異同について分析した結果、学習者のフィラーのバリエーションは母語話者ほど豊富でなく、また複数のフィラーを連続して用いる不自然な使用が散見されるとしている。同じく談話調査の手法を用いた葛（2015）では、日本在住の中国人学習者 8 名を対象に、母語話者のフィラーの使用と比較した結果、学習者の用いるフィラーの数が少なく、母語話者の半分以下であることを明らかにした。

一方、学習者のフィラーのみを取り上げて考察した研究には、小西（2018）、呉（2007a、b）などがある。小西（2018）は、I-JAS 学習者コーパスからインタビュー、ロールプレイ、ストーリーテリングの 3 つのデータを用いて分析した結果、学習者の習熟度が上がるにつれてフィラー全体の使用数が少なくなるが、その形式については母音型フィラーが減り、語彙型フィラーが増えるとしている。このことは、フィラーの使用は学習者の習熟度と関連があることを示唆している。談話調査を実施した呉（2007b）は、韓国人 JFL（韓国で習う）学習者と、呉（2007a）の調査対象である韓国人 JSL（日本で学ぶ）学習者のフィラーの使用を比較し、分析を行った。その結果、フィラーの使用数について、JSL と JFL 学習者に有意差が見られなかったことから、学習者にとって日本語処理に伴う発話負荷が、JSL と JFL とで同程度である可能性を示唆している。また、JFL 学習者は発話数が少ないにもかかわらずフィラーの使用数が多かったことも観察された。

学習者のフィラーを分析した研究にはさらに、日本語談話において、母語である中国語のフィラーの使用が観察された研究もある（陳 2018、高 2018 など）。陳（2018）では、I-JAS 学習者コーパスのデータを通して学習者の用いる日本語の自然性について、学習者と日本語母語話者に評価してもらった。その結果、中国語フィラーの使用は日本語母語話者にマイナスのイメージを与えるとされている。高（2018）は、フィラーに対する意識を調べるため、学習者と、親しい友人関係にある日本語母語話者との談話を収録し、分析した結果、学習者 3 人とも無意識的に中国語フィラーを用いていることが分かった。また、「うん」と「嗯(en)」を混用していることから、それが母語の影響であると指摘されている。

2.3. 問題のありか

以上、整理したように、先行研究においては、日本語学習者の日本語使用には「学習環境」による違いが見受けられるという指摘がある（孫 2008a、b、迫田・細井 2018 など）。しかし、JSL と JFL の違いを中心に検討した研究においては、分析対象のほとんどが日本語教育

で取り扱っている文法項目である。2.2 で見たように、分析対象となったのはアスペクト、動詞そのもの、条件表現、指示詞、授受表現などであり、日本語教育では取り扱っていないものの、日本語会話において重要な働きをしているフィラーなどの言語項目にスポットライトを当てた研究はほぼ見られない。しかも、「学習環境」という要因についても、JSL か JFL かの違いが言語項目の使用に与える影響については、見解が分かれている。

また、フィラーを対象にした談話研究では、日本語レベルによる違いが指摘されつつも、「学習環境」による違いについては異なる意見が存在する。一部の研究では、「学習環境」の違いはフィラーの使用に影響を与えないと主張しているが（呉 2007b）、他方で学習者の日本語レベルや置かれている環境が目標言語圏であるかどうかはフィラーの使用に関連しているとの報告もある（小西 2018）。これらの研究においては、学習者の習熟度や置かれている環境にばらつきがあるため、結果を比較することが難しいという問題もある（呉 2007a、b）。

以上を踏まえると、日本語学習者によるフィラーの使用と学習環境の関係を明らかにするためには、調査対象者の日本語レベルを統一するなど、学習環境以外の変数をできるだけ少なくする必要があると思われる。同時に、「学習環境」の細かな違いや日本語母語話者との接点の多寡による影響も極力小さくしなければならない。そこで、本稿では、以上の条件を可能な限り統制し、JSL か JFL かの違いがフィラーの使用に影響を与えるかどうかについて、実際の談話データを収集して検証することとした。

2.4. 本研究の目的

本稿では、N1⁵⁾ を取得した中国人日本語教室学習者を対象に、彼 / 彼女らと初対面の母語話者との自然談話を用い、JSL と JFL の違いがフィラーの使用に影響するか否かを探りたい。具体的には、以下のことを課題とする。

- (a) 教室指導環境で日本語を習得した JSL 学習者と JFL 学習者とで、フィラーの使用の違いが見られるか。見られるとすれば、具体的にどのような違いか。
- (b) そのような違いはなぜ生じるのか。

3. 調査の概要と分析の枠組み

3.1 では調査の概要を示し、3.2 では分析の枠組みについて述べる。

3.1. 調査の概要

調査は、2021 年 10 月から 2022 年 4 月にかけて、中国の雲南省と日本の大阪で行い、合

計 10 名の大学生のデータを収集した。変数を少なくするため、インフォーマントは以下の条件により選定した。

- 1) 9 歳以降に日本語を習い始めた（言語形成期の統一）
- 2) N1 に合格している現役の学生（習熟度および社会的位置の統一）
- 3) 「教室指導環境」での学習者（学習環境の統一）

本稿で調査の対象となった JSL と JFL 学習は、以下の条件にも満たしている。

- ・ JSL 学習者 5 名（以下「J 学習者」とする。J は Japan の頭文字）
 - 1) 日本で日本語をゼロから習い始めてから、調査時まで日本に滞在している
 - 2) 日本語で日常生活を送り、中国語はほとんど使わない
- ・ JFL 学習者 5 名（以下「C 学習者」とする。C は China の頭文字）
 - 1) 中国で日本語をゼロから習い始めてから、調査時まで中国で生活している
 - 2) 中国語で日常生活を送り、日本語でやりとりする機会が少ない

表 1 はインフォーマントの情報であり、C から J、また教室習得歴の短い順に並べている。教室歴とは、教室という場を持ち、教師の指導などを受けながら日本語を学んでいる期間を表す。学習歴とは、教室歴と、教室歴の他に日本語を習っている、また日本語に触れている期間の合計を表す。以下、全てが収録時のものである。

表 1 インフォーマントの情報

話者 ID	学習場所	現在の所属	性別・年代	教室歴	滞日歴	学習歴
C1	遼寧省・大学	雲南省・大学	女・20代	4年2ヶ月	無	5年2ヶ月
C2	江西省・大学	雲南省・大学	女・20代	4年3ヶ月	無	4年3ヶ月
C3	湖北省・大学	雲南省・大学	女・20代	4年8ヶ月	無	7年3ヶ月
C4	遼寧省・大学	雲南省・大学	男・20代	5年2ヶ月	無	5年2ヶ月
C5	湖南省・大学	雲南省・大学	女・20代	5年3ヶ月	無	6年3ヶ月
J1	京都・語学学校	大阪府・大学	男・20代	1年5ヶ月	1年5ヶ月	1年5ヶ月
J2	大阪・語学学校	大阪府・大学	男・20代	2年1ヶ月	4年7ヶ月	4年7ヶ月
J3	京都・語学学校	大阪府・大学	男・20代	3年9ヶ月	3年9ヶ月	3年9ヶ月
J4	大阪・語学学校	大阪府・大学	女・20代	5年	5年	5年
J5	東京・語学学校	大阪府・大学	男・20代	5年6ヶ月	5年6ヶ月	5年6ヶ月

次に、表 2 は、対話者となった日本語母語話者の情報である。CN は C1 ～ C5 の対話者で、JN は J1 ～ J5 の対話者である。対話者の職業は異なるものの、学習者にとって初対面の人であるという点は同様である。設定を初対面の教師に統一した理由は、フィラーの使用には会話の相手の社会的属性と談話場面のフォーマル度が最も大きく関わっているという指摘があるからである（高 2018）。CN は中国に 10 年以上住んでおり、JN は旅行で中国に 2 回訪れたことがある。いずれにしても、中国語のできる点は 2 人に共通している。ただし、この点について、

CN は談話中に学習者に伝えたが、JN は全く言及しなかった。

表 2 対話者情報

話者 ID	性別・年代	出身地	現在地	職業
CN	女性・30代	姫路	中国・雲南省	日本語教師
JN	女性・30代	東京	日本・大阪府	英語教師

各談話は、35分から40分であったが、より自然な談話を収集するため、談話の冒頭と末尾の一部を切り取り、32分ほどの録音を文字化した。また、文字起こしは宇佐美(2019)の「基本的な文字化の原則改訂版(BTSJ: Basic Transcription System for Japanese)」に則って作成した(本稿の末尾に使用した記号の凡例を記載)。その理由は、「BTSJ」は談話を定性的・定量的に分析することが可能なためである。

3.2. 分析の枠組み

次に、本稿で採用する分析の枠組みを示す。3.2.1において本稿で対象とするフィラー、3.2.2においてフィラーの分類を示す。

3.2.1. 本稿で対象とするフィラー

本稿におけるフィラーは、田窪・金水(1997)、山根(2002)、小出(1983)、定延(2010)の定義を参考にし、次のように定義する。

- 1) 実質的内容が希薄でそれ自体が命題内容を持たず発話全体の意味に影響を与えない。
- 2) ほかの発話と応答関係・接続関係・修飾関係にない。
- 3) 生起位置が統語的に制限されない。
- 4) 時間稼ぎ的な言語表現であり、発話の一部分を埋める「有声休止」である。

以上の定義を踏まえ、「フィラー」を抽出して分析を行う。「フィラー」の選定は、以下の手順で行った。

- ①収集した音声データを文字起こししてからエクセルに保存する。
- ②次に、それぞれのフィラーと思われる項目にタグを付し、一つ一つの項目に対して、筆者とある日本語母語話者とで前後の文脈を確認しながら判断する。

また、日本語で発せられたフィラーは日本語で表記し、中国語で発せられたフィラーは漢字かそれに近い音声の表記で示している。中国語フィラーであるかどうかの判断も、筆者とある中国語のできる日本語母語話者の総合判断によるが、2人の判断に相違があった場合には、疑

間のある音声をスロー再生し、もう一度聞いてから判断を行い、合意に至るまで議論した。なお、両者の合意に至らなかったものは、分析の対象から外すこととした。

3.2.2. フィラーの分類

資料としている談話データには、「日本語フィラー」のほか、「中国語フィラー」も出現した。したがって、本稿では便宜上、日本語で発せられたフィラーを「日本語フィラー」、中国語で発せられたフィラーを「中国語フィラー」とする。「日本語フィラー」には、以下のようなものがある。以下、談話例について、「152」などの数字は発話文番号を示す。

(2) J2 が宝石の販売の仕事を始めたきっかけについて

- 152 JN それはどういうきっかけでその世界に行ったんですか？。
- 153-1 J2 あー、そうですね、あの時はちょっと、何っていうか、大学院が実は、あの一、大学院の、
- 154 JN はい。
- 153-2 J2 なんか入学がそんなに、なんか探すのは、申し込みのは、
- 155 JN うん。
- 153-3 J2 あの一、そんなによく進めてないです、進めてなかったですので、
- 156 JN はい。
- 153-4 J2 とりあえず仕事かなんかしようかなと思います。
- 157 JN えー。

学習者のフィラーの使用と「学習環境」との関係把握するには、まず談話に用いられたフィラーを分類し、それを量的に把握する必要があると思われる。そこで、本稿では、フィラーの形式的特徴により、「日本語フィラー」と「中国語フィラー」を、「音声型」「語彙型」「表現型」の3つに分類する。ただし、「中国語フィラー」の表現型については1例しか見られなかったため、中国語フィラーの分類に関する分析ではこの型は対象外とする。

表3 フィラーの分類

	音声型	語彙型	表現型
日本語フィラー	あ(ー)、え(ー)、ん(ー)	んーと、えっ/ーと、なんか、まあ、この、その、それ、あの(ー)、あれ	どのようにいいで、というか、何というか、っていうか、何っていうか、どういうか、何でしょうね、そうですね
中国語フィラー	e(ー)、eng(ー)、嗯(en)	就(ー)(jiù ー)、就是(jiù shì)、那个(nà / nèi ge)、那种(nà/nèi zhǒng)	怎么说呢(zěn me shuō ne)

なお、中国語フィラーは、「嗯(en)」は日本語の「ん(ー)」に、「就/就是(jiù / jiù shì)」は「それは」に、「那个/那种(nà / nèi ge)」は「それ/あれ」「その/あの」に、「怎么说呢(zěn me shuō ne)」は「どのように言ったらよいか」に相当する。また「e(ー)」については、中国語の会話に頻繁に使用され、漢字では「呃(e)」や「额(e)」で表せるが、フィラーとしての漢字の表記が定まっていないため、本稿では音声に忠実に、「e(ー)」と記載する。なお、中国語フィラーの「e(ー)」は、日本語フィラーの「え(ー)」と音声的に似ているが、国際音声記号(IPA)で表すと、それぞれ「ɤ」と「e」になることから、その2つの音を識別することが不可能ではない。なお、データの中で使用された「e(ー)」と「え(ー)」の区別については、前節に述べたように、筆者とある中国語のできる日本語母語話者との相談によって行った。

4. 調査結果

本節では、3節を踏まえ、調査した結果について述べる。4.1 フィラー全体の使用状況、4.2 日本語フィラーの使用状況、4.3 中国語フィラーの使用状況の順に調査結果を示す。

4.1. フィラー全体の使用状況

表4は、フィラー全体の使用状況である。本節以降の表における数字はフィラーの使用回数を示し、括弧内はグループごとのフィラーの使用率を表す。「-」は、使用しないことを意味する。

表4 フィラー全体の使用状況

	日本語フィラー	中国語フィラー	合計
Cグループ	483 (45%)	597 (55%)	1080
Jグループ	1335 (100%)	-	1335

表4から以下のことが分かる。

- 1) フィラー全体の使用回数について、CグループよりJグループのほうが多いが、両者の間には有意な差がない。
- 2) 日本語フィラーは両グループともに使用するが、中国語フィラーは、Cグループは使用するのに対し、Jグループは使用しない。
- 1) のフィラー全体の使用回数について、JグループがCグループより多かった理由として、発話の長さが関係していると考えられる。まず、Cグループについては、次のような特徴がある。

(3) ある都市について

- 25 C1 その時は一度だけ「都市名3」に来たことがあります。
- 26-1 CN あー,,
- 27 C1 はい=。
- 26-2 CN =じゃあ、ももとの出身は「都市名3」ではない?? [↓]。
- 28 C1 うん、はい。

(3) においてC1は、相手の「都市3の出身ではない」という問いのような発話を受け、必要最低限の会話である「うん、はい」で応答している。このような特徴はC1を含むCグループの学習者に共通している。一方、Jグループの学習者は、下記(4)のように、なるべく会話を発展させようとするように思われる。

(4) 日本人学生と外国人留学生向けの大学入試について

- 413-1 JN ≪沈黙1秒≫でも、それについてはどう思いますか?,,
- 414-1 J1 <笑い>,,
- 413-2 JN レベルが違うこと。
- 414-2 J1 えっと、やはり、留学生としてはありが、ありがたいことだと思います。
- 415 J1 でも、私ような<笑い>、外国人留学生がはい、大学に入ったら、ついて来られるかも問題です。
- 416 JN うーん。
- 417-1 J1 まあ、今は大体問題、あんまりないですけど,,
- 418-1 JN あー,,
- 417-2 J1 よかったです。

(4) の例において、日本人向けと外国人留学生向けの大学入試の難しさが異なるということ

について感想を求められた J1 は、414 行目でまず「留学生としてありがたい」という自分の意見を述べ、415 行目でそれに対する懸念も表明し、さらには 417 行目でその懸念は現段階では自分には起こっていないと付け加えた。このことから、相手の質問に対して、C グループの学習者は必要とされる情報のみを提示し、J グループの学習者は求められる以上の情報までも共有しようとする傾向があることが分かる。学習者の談話の情報量を反映する総使用語数と異なり語数を KH Coder⁶⁾によって整理すると、各グループの結果は次の表 5 のようになる。

表 5 談話の情報量

	総使用語数	異なり語数
C グループ	3802	489
J グループ	4161	570

表 5 に見るように、J グループの学習者は、C グループの学習者より総使用語数と異なり語数がともに多いことが分かる。このようにして、発信しようとする情報量が多くなるにつれて発話自体が長くなり、それに比例して J グループの学習者のフィラーが増えることが予想される。しかし、t 検定を行ったところ、p 値は 0.196009817 (> 0.05) であり、有意差は見られなかった。本稿の調査結果では、「外国語環境習得」か「第二言語環境習得」かの違いがフィラーの使用回数に与える影響は小さいと言えよう。しかし、本稿のインフォーマントは 5 名である。今後、インフォーマントを増やして確認することが必要である。

2) の日本語フィラーについて、両グループの学習者がともに使用するの、それが日本語談話において欠かせないものだからである。一方、中国語フィラーが C グループの学習者だけに用いられ、J グループの学習者には用いられないのは、学習者が置かれた日々の発話環境によるところが大きいと思われる。J グループの学習者は日本語での会話に慣れており、日本語の談話において日常のデフォルトの言語である日本語を自動的に選択することが推測される。一方、C グループの学習者は母国である中国で日本語を学習しているため、生活の面は当然のこと、勉強の面もほとんどの会話が中国語で行われている。それ故に、日本語母語話者との初対面の日本語談話においても、日常のデフォルト言語である中国語が脳の中で活性化しており、完全な日本語モードに切り替えられないことが窺われる。この点については、4.3 で詳述する。

4.2. 日本語フィラーの使用状況

次に、学習者が使用した日本語フィラーを詳細に分析する。日本語フィラーの使用状況は表 6 の通りである。個々の形式の使用回数は、稿末の付表にまとめたので参照されたい。

表 6 日本語フィラーの使用状況

	表現型	語彙型	音声型	合計
C グループ	5(1%)	300(62%)	178(37%)	483
J グループ	58(4%)	1140(86%)	137(10%)	1335

表 6 からは、以下のことが分かる。

- 1) 日本語フィラーの総使用回数について、C グループと J グループの間に有意差がある。
- 2) 語彙型フィラーの使用率については、J グループは C グループより 24 ポイント高いが、音声型フィラーの使用率については、C グループは J グループより 27 ポイント高い。

まず、1) について、C グループの学習者は 483 回の日本語フィラーを用いているのに対し、J グループの学習者はその 3 倍近くの 1335 回を使用しており、両グループ間に有意差が認められた (p 値 $0.001868262 < 0.05$)。このことから、日本語フィラーの使用回数は、学習者が置かれているのが「外国語環境」か「第二言語環境」かによって影響されると言える。「第二言語環境」にいる J グループの学習者は、「外国語環境」にいる C グループの学習者より日本語フィラーを多く用いる傾向にあり、それは主に、日本人や自然な日本語に接する頻度によるものと考えられる。J グループの学習者は目標言語である日本語の用いられる日本に住んでいるため、学校の授業のほか、日常生活もほとんど日本語で行われている。それに対し、後者は目標言語である日本語の用いられない母国の中国に住んでいるため、普段、日本語のインプットとアウトプットを含む日本語に触れる機会が限られており、専攻である日本語の授業ですら主に中国語で行われている。以上のことから、授業では取り上げられず、主に自然習得されることが考えられる日本語のフィラーについては、日本語に触れる頻度が多い J グループの学習者がそれを頻繁に使用することが理解できる。

次に、2) の、3 種類の日本語フィラーについて、語彙型フィラーは両グループの学習者がともに多く用いているが、その使用率については J グループが C グループより 24 ポイント高い結果となった。一方、使用が二番目に多い音声型フィラーに関しては、C グループの使用率は J グループより 27 ポイントも多かった。この結果は、日本語学習が「第二言語環境」で行われているか、「外国語環境」で行われているかによって使用するフィラーの種類が異なることを示唆している。なお、このような学習環境の違いは、フィラーの種類だけでなく、フィラーの形式にも影響を及ぼす可能性がある。次の例 (5) と例 (6) で確認しよう。

(5) ある都市の言葉について

- 218 CN ふーん、じゃあ、お父さんとお母さんは「都市3」の人じゃないの？。
- 219 C2 ≪少し間≫「都市3」人“都市3ひと”です。
- 220 CN あ、だけど方言使わないの？。
- 221-1 C2 で、でも、eー、あの一、普通、普通話,, [普通(話)は中国語で pu tong (hua)]
- 222 CN うんうん。
- 221-2 C2 小さい時からあの一、普通話で 【,, [普通話は中国語で pu tong hua]
- 223 CN **】**標準語、ねー。

(5) において C2 は、221 行目から「普通話 (pu tong hua)」を表す日本語の表現を用いるつもりであったが、すぐには思いつかなかったため、相手を考慮しながらその目的を達成させるため、「eー」や「あの一」で時間を稼ごうとしていることが分かる。ただし、この作戦が上手くいかなかったため、その次に戦略を変え、CN も多少理解できる自分の母語である中国語に置き換えた様子が見て取れる。一方、Jグループの学習者の場合には、同じように日本語の表現が思い出せない場合、例(6)のように、あくまでも日本語で表現することを試みている。

(6) ひらがなとカタカタに対する感想について

- 67-2 J1 カタカナはすごく苦手です。
- 68 JN あー、そうですか。
- 69 J1 ≪沈黙1秒≫はい、なんか、特になんかある、ある機会なんかバー“バー”に見て、メールを見ても全然分からない。
- 70 JN メール？。
- 71 J1 いや、えっと、メニュー。
- 72 JN あ、メニュー。
- 73 J1 はい。
- 74 JN あー、あの一、料理屋さんに行った時？。
- 75 J1 はい、なんか、え、バー“バー”に行った時。
- 76 JN えっ？。
- 77 J1 酒を飲む場所、なんか。
- 78 JN あ、バーですか？。
- 79 J1 はい。

(6) では、「バー」という言葉がトラブル源となっており、それを解決しないと会話が続かない可能性があるが、J1 は JN に理解されない「バル」ということばを自らの母語に置き換えることなく、日本語で言い換えることを試みている。なお、このような事例は、J グループのほかの学習者にも見受けられた。

以上のように、日本語フィラーについては、日本語を習った環境が「第二言語環境」か「外国語環境」かによって、学習者の使用するフィラーの種類、また同じ種類でもその形式が異なる可能性があると言及できる。

4.3. 中国語フィラーの使用状況

次に、中国語フィラーについて分析する。中国語フィラーの形式ごとの使用状況は、以下の表 7 のようである。各形式は、使用頻度の多い順に並べてある。

表 7 中国語フィラーの使用状況

	表現型			語彙型				合計
	e(一)	eng(一)	嗯 (en)	就是 (jiù shì)	那个 (nà/nèi ge)	就(一) (jiu 一)	那种 (na/nei zhong)	
C1	95	27	4	8	4	4	1	143
C2	75	3	5	1	1			85
C5	119	6	2	1				128
C3	232	3		1				236
C4	4							4
合計	525	39	11	11	5	4	1	596
使用率	575(96%)			21(4%)				

表 7 から分かることは、以下のようにまとめられる。

- 1) 中国語フィラーにおいては、音声型フィラーの使用率が最も高く、96% に上っており、そのうち「e(一)」の使用は、C グループの学習者全員に共通している。
- 2) 中国語フィラーの使用回数について、最も多いのは C3 で、最も少ないのは C4 である。また、その形式について、C1 は最も多くの種類のものを用いているのに対し、C4 は 1 つの形式しか使用していない。

まず 1) について、C グループの学習者は音声型フィラーを多用し、そのうち、「e(一)」の使用が最も多く、全員に見られた。その理由は、3 つあると考える。一つ目の理由は、中国語フィラーが、日本語のフィラーと類似する位置で使用されるからである。例 (7) を見てみよう。

(7) 日本の詩人について

258-1 C5 あのー、先生、

259 CN はい。

→ 258-2 C5 えー、日本の有名な詩人、詩人は一谷川俊太郎のことが、

260 CN うん、谷川俊太郎、うんうんうん。

→ 258-3 C5 eng、谷川俊太郎のことがよく知っていますか<笑いながら>？。

261 CN えっとね、私はねー、文学系はあんまり知りません、うん。

(7) では、C5 は自分が好きな日本人の詩人について CN が知っているかどうかを確認している。258-2 行目において、C5 は、CN が日本人とはいえ、その詩人のことを必ずしも知っているわけではないことを配慮し、どのように質問するかを考えている最中に「e(ー)」を使っている。また、CN がその詩人のことを知っているかどうかについて直接に答えていないということを受け (260 行目)、C5 はその状況を呑み込み、次の発話を産出するための時間を「eng」で稼ごうとしている (258-3 行目)。この「e(ー)」や「eng」のようなフィラーは、統語的に制限されておらず、相手を配慮して沈黙を避けることができ、円滑なコミュニケーションに役立っていると考えられる。この点について、日本語フィラーと中国語フィラーは類似している。なお、音声型フィラー、特に「e(ー)」が多用されるのは、日本語の「え(ー)」と音声的に似ていることが関係しているかもしれない。国際音声記号 (IPA: Alphabet Phonétique International) では、中国語フィラーの「e(ー)」と日本語フィラーの「え(ー)」は、それぞれ「ɤ」と「e」で示されるが、両者とも調音時の舌の位置が類似しているため、音声的に似ていると言える。二つ目の理由は、前節で日本語フィラーについて述べたことと同様に、日常的に使っている言語の影響を受けているからである。C グループの学習者にとって、日々使っている母語である中国語は社会的に無標 (unmarked) であり、専攻としている日本語は日常的に使用されないという点で有標 (marked) である。このように、学習者は、日本語談話において、普段、中心的に使用している言語、すなわち母語の中国語から影響を受けて、中国語フィラーを使用している可能性がある。三つ目の理由は、中国語の使用が許容されるという点にある。このことは、以下の例 (8) のように、フィラー以外の部分にも中国語の使用が見られることから分かる。

(8) 日本のある都市について

- 275 C1 こ、そのそのところの日本語の発音は分かりません<笑い>。
→276 CN <笑い>えっと、私多少中国語分かります。
→277 CN ちょっと中国語分かるヨ。
→278 C1 e二、宇都宮 (yǔ dū gōng)。[中国語で]

(8) では、C1 が日本のある都市の読み方が分からない際に、CN は中国語でもいいと提案をしている。また、次のように、談話の途中で、CN が自発的に中国語の言葉を発する例もある。

(9) C2 の家庭内の言葉について

- 212 CN あ、「都市の名前」はあんまり使えない??=。[「都市の名前」は中国語で]
213-1 C2 =あー、e、私の父と母は、
214 CN うん。
213-2 C2 あんまり話しません=。

以上の例から、知らず知らずのうちに、CN は中国語ができるという情報が学習者に伝わっていることが分かる。少なくとも本稿で調査した C グループの学習者は中国語の使用が許容される環境にあり、このことが中国語フィラーの使用を促す要因となった可能性がある。

2) の中国語フィラーの使用回数の個人差については、個々の学習者が置かれている学習環境等をさらに詳細に調査する必要がある。本稿では個人差があることの指摘にとどめ、その調査、分析は今後の課題とする。

5. 考察

先に 2 節で見たように、これまでのフィラーの習得研究では、学習者の日本語レベルと関連があると指摘されている一方、「学習環境」による影響については見解が分かれている。「学習環境」による違いがないと主張する研究では、調査の対象となった学習者の日本語レベルなどに異なりがあり、結果に疑問が出されている。このことを承けて本稿では、学習者のフィラーの使用と「学習環境」の関係を探るため、日本語レベルが同じである、それぞれ第二言語環境と外国語環境で日本語を学んだ中国人日本語教室学習者グループを対象にして調査を試みた。以下に 2.4 で設定した課題を再掲する。

(a) 教室指導環境で日本語を習得した JSL 学習者 (J グループ) と JFL 学習者 (C グループ) とで、フィラーの使用に違いが見られるか。見られるとすれば、具体的にどのような違いか。

(b) そのような違いはなぜ生じるのか。

以下、本節ではこのうち (b) の課題について、両グループに違いが見られた日本語フィラーの使用 (5.1) と中国語フィラーの使用 (5.2) に分けて、そのような違いが生じた理由について考察を加える。4.1 で整理したフィラー全体の使用回数については両グループの間に有意な差は認められなかったため、考察から省く。

5.1. 日本語フィラーの使用について

上記の課題 (a) について、本稿で得られた日本語フィラーの使用結果は以下の通りである。

(a-1) 使用回数について、JSL 学習者は JFL 学習者より有意に多かった。

(a-2) 語彙型の使用率については、JSL 学習者は JFL 学習者より高かったが、音声型の使用率については逆に、JFL 学習者のほうが JSL 学習者よりも高かった。

このうち (a-1) について、その理由は、4.2 節で述べたように、学習者が日本人や自然な日本語に頻繁に接するかどうかということに関連していると推測される。JSL 学習者は、学校においてだけでなく、日常生活の様々な場面においても日本語を使用することが求められている。それと対照的に、JFL 学習者は母国である中国に住んでおり、外国語である日本語を使用する機会が極めて限られている。その上、彼 / 彼女らは、日本語を専攻としているにも関わらず、受けている日本語授業のほとんどが中国人の先生によって行われ、日本人の先生と話せる日本語会話の授業は週に 1 回程度しかない。このような背景から、JSL 学習者が日本語フィラーを多用しているのは、日本語に頻繁に接する環境にあるからであり、JFL 学習者にその使用が少ないのは日本語に接することが少ないからであると理解される。以上のように、主に自然習得とされる日本語フィラーの使用の度合いは、日本語との接触の多寡に関わっていることが示唆されている。なお、本稿で有意差が見られたのは、あくまでも日本語フィラー全体の使用回数である。今後はサンプル数を増やし、個々の日本語フィラーに注目した詳細な分析が必要である。また、今後の課題ということでは、呉 (2007b) では、本稿の結果とは逆に、JFL 学習者のほうが JSL 学習者よりもフィラーの使用頻度が高いという結果が出ているが、呉 (2007b) が採用した調査の方法は、本稿の自由談話とは異なるアニメーションを見てその内容を特定の相手に伝えるという伝達のタスクである。採用する調査の方法によって異なった結果が得られる可能性も考えられ、今後の調査においては調査法への配慮も必要である。

(a-2) のフィラーの種類について、小西 (2018) は、学習者のレベルが上がるにつれてフィ

ラー全体の使用回数が少なくなるが、用いるフィラーの種類が変わるとしている。具体的には、母音型フィラーが減り、語彙型フィラーが増えると述べている。この指摘によれば、本稿における JSL 学習者は JFL 学習者より日本語のレベルが高いということになる。しかし、3 節に示したように、本稿で調査対象としているのは、日本語レベルが同じ (N1) 学習者である。本稿において、C グループの学習者と J グループの学習者の用いる日本語フィラーの種類に (a-2) に示したような差が見られたのは、学習者の日本語のレベルよりも、JSL か JFL かの違いによる可能性が大きいものと推測される。ただし、これは、現状では、あくまでも、本稿の調査対象である日本語教室学習者に限った結果である。一方、大学や日本語学校などの日本語教育機関に通わず、日本語を習得している学習者もいるので、今後は、「自然習得環境」の学習者も視野に入れた、JSL か JFL かの違いによる影響を検討すべきである。

5.2. 中国語フィラーの使用について

次に、C グループにのみ使用される中国語フィラーの使用について、言語的要因 (5.2.1) と社会的要因 (5.2.2) の二つの側面から考察を加える。このことについては、すでに 4.3 において、C グループ (JFL) の学習者に「e(一)」が多用されることの理由として、次の 3 つをあげた。

1. 中国語フィラーは、発話の中で、日本語のフィラーと類似する位置で使用されること。
2. C グループの学習者の頭の中では、日常的に使用している言語 (中国語) が活性化していること。
3. 会話相手の日本語母語話者が中国語の能力をもっており、C グループの学習者が会話の中で中国語を使用することが許されていること。

ここではこのことについて、あらためて、言語的要因と、社会的要因に位置づけて整理する。

5.2.1. 言語的要因

まず、学習者に中国語フィラーの使用が見られたことの言語的要因について見ていく。具体的には、①日本語フィラーも中国語フィラーも発話の中の類似する位置に現れること、②言語転移が生じていることという、互に関連する 2 つのことが理由であると推測される。以下、順に説明する。

① 両言語の発話の中の類似する位置に現れること

中国語フィラーは、日本語フィラーと同じように、コミュニケーションの円滑さを保つことに寄与し、話し手は、間合いをとったり、考えたりする時間を稼ぐために使用している。また、

中国語の単語や文法などはある規則に則って使わないと正しい文や発話を構成することができないが、フィラーの生起環境は統語的な制約が緩く、日中両語において、発話の中の類似する位置に生起する。先に 4.3 で述べた、「e(一)」の使用がこのことを裏付けている。しかし、「e(一)」の場合、なぜ JFL 学習者がそれを好んで使用しているのか説明が必要である。このことには、これも 4.3 で述べた「言語転移」が関係していると思われる。

② 言語転移の可能性

言語転移とは、バイリンガルまたは多言語話者によるある言語からほかの言語への言語的特徴の何らかの適応の言語現象である。言語転移は、転移の元となる言語が、学習者の言語能力として、また置かれた環境において日常的に使用するという支配的な立場にある場合に起こりやすい。例えば、本稿で対象としている JFL 学習者は、日本語を習い始めてから調査時に至るまで中国に滞在し、日本語の授業を受けているが、その教授言語はほぼ中国語であり、普段は日本語を話す発話環境にない。つまり、JFL 学習者にとっての優勢言語（日々中心に使用する言語）は母語の中国語であるわけである。それにひきかえ、JSL 学習者は、日本語を学び始めてから調査時にかけて、日本に滞在し、日本語またはほかの科目の授業を受けている。その教授言語もほとんど日本語であり、日頃は日本語を話すことが求められている発話環境にある。以上のことを踏まえれば、JFL 学習者に見られた中国語フィラーは言語転移によるものである可能性が推測される。なお、高(2018)では、日本に留学している中国人上級学習者 3 人とも「うん」と「嗯(en)」を混用していたことを報告し、その理由として、両者が似ているため、母語の影響があった可能性を指摘している。しかし、母語の影響であれば、同じく日本に留学している本稿の JSL 学習者にも「嗯(en)」の使用が見られてもよいはずであるが、それは観察されなかった。このような違いが生じたことについては、高(2018)は学習者とその友人の日本語母語話者との談話を資料としたのに対し、本稿は学習者と初対面の日本語母語話者との談話をういた点を考慮しなければならないが、本稿では、あくまでも可能性ではあるが、C グループの学習者の中国語フィラーの使用は母語からの言語転移があったもの、J グループの学習者については日常生活で日本語の使用が優勢であることから母語の影響が抑制されたものと考えておく。

5.2.2. 社会的要因

次に、JFL 学習者にのみ中国語フィラーが見られたことの社会的要因として、4.3 で③日々の言語使用環境が中国語環境（外国語環境）であることと、④そのような環境では談話において中国語の使用が許容されやすいことの 2 つのことを述べたが、ここで少し敷衍して説明する。

③ 日々の言語使用環境が中国語環境（外国語環境）であること

日本語談話において、中国語フィラーの使用が見られた理由として、日々の言語使用環境が中国語環境であることが挙げられる。日常生活や学校の授業では、CグループのJFL学習者はほとんど母語の中国語でやりとりしているため、頭の中で中国語モードが活性化している。それに対し、JグループのJSL学習者は日本語を生活の手段として毎日使っており、日本語でさまざまな場面を切り抜けなければならない状況にあるため、日本語モードの会話に完全に親しんでいると言える。JFL学習者にとっては、今回のような日本語を使用する談話調査は言語的負担の大きいもので、日常的に使用している中国語と大きく離れた日本語に切り換えることは困難であるのに対し、JSL学習者にとっては、普段の言語使用と似たような場面での調査であるため、言語の選択にかかる負担はそれほど大きくはない。このことから、コミュニケーションにおいて問題が起きた際に、JFL学習者は母語である中国語を借りてその場を切り抜けようとする傾向があるのに対し、JSL学習者は日頃から日本語による会話に親しんでいるため、求められる言語である日本語でその問題を解消しようとするのが窺える。

④ 談話において中国語の使用が許容されやすいこと

すでに指摘したように、JFL学習者が中国語フィラーを使用する理由の一つは、(今回の調査では特に) 談話において中国語の使用が許容されていたからであると思われる。JFL学習者は中国本土で談話調査に参加しているため、一般的に中国語を使用することに違和感を覚える環境ではない。また、JFL学習者の今回の対話の相手であるCNは、自身、積極的に中国語を使ったり、また相手に中国語で応答することを承認したりしている。CNのこの2つの行動は、いずれも、JFL学習者が日本語の談話において、中国語を使いやすくしていることが推測できる。一方、JSL学習者は日本で日本語を用いた談話調査を受けており、中国語を話すことは言語選択の規則に逸脱する行為となる。初対面という談話場面は、とりわけ中国語を使用するのが難しい場面であり、仮に中国語で会話しようとする場合にも、その前に、会話の相手である日本語母語話者は中国語ができるかどうかを確認する手順を経なければならない。

以上のように、③日々の言語使用環境が中国語環境であること、④談話において中国語の使用が許容されやすいこと、という2つの社会的要因が中国語フィラーを誘発しやすくしていると言える。

なお、言語的要因と社会的要因では、中国語フィラーがJFL学習者にしか見られなかったことから、言語的要因よりも社会的要因のほうが強く働いていると思われる。

6. まとめと今後の課題

本稿は、JSL と JFL の違いがフィラーの使用に影響を与えるかどうかを明らかにするために、JSL と JFL の中国人教室習得者を対象に、彼 / 彼女らと母語話者との初対面場面での自由談話を用い、フィラーの使用状況を分析した。その結果、次のことが明らかになった。

(a) フィラー全体の使用について

- ・フィラー全体の使用回数について、JSL 学習者と JFL 学習者とで相違がない。
- ・その理由は、「教室指導環境」にあると思われる。

(b) 日本語フィラー

- ・日本語フィラーの使用回数について、JSL 学習者は JFL 学習者より有意に多かった。
- ・音声型フィラーの使用率について、JFL 学習者のほうが JSL 学習者よりも大幅に高かったが、語彙型フィラーの使用率について、JSL 学習者は JFL 学習者より顕著に高かった。
- ・JSL 学習者と JFL 学習者とで相違が見られた要因として、日本人や自然な日本語との接触の多寡が考えられる。

(c) 中国語フィラー

- ・中国語フィラーの使用について、JFL 学習者にしか見られなかった。
- ・音声型フィラーの使用率が非常に高く、そのうち、「e(一)」の使用が全員に見られた。
- ・JFL 学習者のみに中国語フィラーの使用が見られた要因として、社会的要因と言語的
要因がある。なお、前者のほうが後者よりも効いている。

一方、本稿には残された課題も多い。たとえば、フィラー全体の使用回数については、呉(2007b)などの先行研究と同様に JSL 学習者と JFL 学習者で有意差は見出せなかったが、このことの原因として、インフォーマントの数が少なかったこと、いずれのグループも教室環境習得者であったこと、などが関わっていることが考えられる。今後、インフォーマント数を増やすとともに、フィラーは自然習得されるところの大きい言語項目でもあるので、教室指導環境で日本語を習得した学習者だけではなく、自然習得者も含めて研究を進めていきたい。

注

- 1) 本稿では、外国語と第二言語を区別しておらず、母語以外の言語を第二言語とする。
- 2) JSL と JFL の扱い方は研究によって異なるため、2 節では JSL か JFL を先に記述し、次にその研究で具体的に扱っている定義を () に補足する形をとる。なお、JSL か JFL の表示がない場合は、その研究で言及されていないことを表す。
- 3) 多言語母語の日本語学習者横断コーパス (International corpus of Japanese as a second language) であり、本稿では I-JAS 学習者コーパスとする。

- 4) 村田 (2020) では、JSL のうち、自然習得者も調査対象としたが、本稿では関心のある「教室指導環境」での習得者のみについて述べた。
- 5) 日本語能力試験のレベルは、N1 から N5 までの 5 段階に分かれている。N1 が最難関の高度なレベルであり、N5 が最も難易度の低い基礎レベルである。
- 6) 「KH Coder」とは、「テキスト型データの計量的な内容分析（計量テキスト分析）もしくはテキストマイニングのためのフリーソフトウェア」である。KH Coder は、どんな言葉が多く出現していたのかを頻度表から見る事ができるので、本稿では総使用語数と異なり語数を出すために使用した。

参考文献

- 稲葉みどり (1991) 「日本語条件文の意味領域と中間言語構造」『日本語教育』75 : 87-99.
- 宇佐まゆみ (2019) 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese : BTSJ) 2019 年改訂版」<https://ninjal-usamilab.info/wp-content/uploads/2020/01/BTSJ2019.pdf> (最終閲覧日 2023.04.24)
- 王雋 (2018) 「JSL 環境および JFL 環境における多義動詞『あがる』『みる』の習得—中国語を母語とする日本語学習者を対象に—」『地球社会統合科学研究』9 : 9-19、九州大学大学院地球社会統合科学府.
- 呉美京 (2007a) 「発話言語 (L1、L2) による負荷は、言いよどみの産出に影響を及ぼすのか—日本語母語話者と韓国人日本語学習者の日本語発話に基づく分析—」『日語日文学』33 : 131-144、大韓日語日文学會.
- 呉美京 (2007b) 「日本語の発話における言いよどみ使用の実態調査—韓国在住の JFL 学習者の発話分析を中心に—」『日語日文学』35 : 1-15、大韓日語日文学會.
- 葛欣燕 (2015) 「機能に基づく日本語フィラーの使用実態—中国人日本語学習者と日本語母語話者との対照に着目して—」『地球社会統合科学研究』2 : 35-44、九州大学大学院地球社会統合科学府.
- 鎌田修 (1993) 「日本語の中間談話文法の一側面」『日本語・日本文化研究』1 : 14-28、京都外国語大学留学生別科.
- 許夏珮 (1997) 「中・上級台湾人日本語学習者による「テイル」の習得に関する横断研究」『日本語教育』95 : 37-48.
- 小出慶一 (1983) 「言いよどみ」水谷修編『講座日本語の表現 3』、pp.81-88、筑摩書房.
- 高丹 (2018) 「中国人上級学習者の自由会話におけるフィラーの使用—自己評価と母語話者評価のずれを中心に—」桜美林大学言語教育研究科 修士論文.
- 小西円 (2018) 「日本語学習者の習熟度別に見たフィラーの分析」『国立国語研究所論集』15 : 91-105、国立国語研究所.
- 迫田久美子・細井陽子 (2018) 「International Corpus of Japanese as a Second Language (I-JAS)—日本語学習者の言語研究と指導のために—」『英語コーパス研究 = English corpus studies』25 : 133-150、英語コーパス学会.
- 迫田久美子・細井陽子 (2020) 「異なった学習環境における日本語使用の正確さと複雑さ—日本語学習者コーパス (I-JAS) の分析に基づいて」『計量国語学』32(7) : 403-418.
- 定延利之 (2010) 「会話においてフィラーを発するという事」『音声研究』14(3) : 27-39.
- 孫愛維 (2008a) 「第二言語及び外国語としての日本語学習者における現場指示の習得—台湾人の日本語学習者を対象に—」『日本語教育論集』24 : 49-64、国立国語研究所.
- 孫愛維 (2008b) 「第二言語及び外国語としての日本語学習者における非現場指示の習得—台湾人の日本語学習者を対象に—」『世界の日本語教育』18 : 163-184、国際交流基金.

- 田窪行則・金水敏（1997）「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会編『文法と音声』、pp.257-279、くろしお出版。
- 田中真理（1996）「視点・ヴォイスの習得—文生成テストにおける横断的及び縦断的研究—」『日本語教育』88：104-116。
- 陳冠霖（2018）「日本語音声に対する台湾人日本語学習者による自然性評価」大阪大学言語文化研究科 博士論文。
- 津留崎由紀子・中嶋敦子・金志宣・近藤彩・齋美智子・広田妙子（1997）「予測文法研究—後続文完成課題における JSL と JFL の予測能力について—」『言語文化と日本語教育』13：182-209、お茶の水女子大学日本語文化学会。
- 永井絢子（2017）「対話に見られる日本語学習者のフィラー—連続使用に注目して—」『日本語教育方法研究会誌』24(1)：10-11。
- 村田裕美子（2020）「異なる環境で習得した日本語学習者の発話に関する計量的分析—対話に現れる音声転訛（縮約形・拡張形）に着目して—」『計量国語学』32(4)：207-223。
- 山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版。
- 尹喜貞（2006）「授受補助動詞の習得に日本語能力及び学習環境が与える影響—韓国人学習者を対象に—」『日本語教育』130：120-129。

欧文の文献

- Collentine, J. (2004) The effects of learning contexts on morphosyntactic and lexical development. *Studies in Second Language Acquisition*.26-2, 227-248, Cambridge University Press.
- Iwasaki, N. (2011) Filling social space with fillers: Gains in social dimension after studying abroad in Japan. *Japanese Language and Literature*.45-1, 169-193, The American Association of Teachers of Japanese.
- Wilkinson, S. (1998) Study abroad from the participants' perspective : A challenge to common beliefs. *Foreign Language Annals*.31-1, 23-39, Wiley-Blackwell.

記号凡例（宇佐美 2019：16-18 より 一部の記号の説明は筆者による加筆を加えた）

。	1 発話の終わり。1 発話文の印。
„	発話文の途中に相手の発話が入り、前の発話が終わっていないこと。
、	①日本語表記の慣例、②発話と発話の間に短い間がある場合。
？	疑問文。
[]	文脈情報。
<> {<}	重ねられた発話には、<>{<}。
<> {>}	重ねた発話には、<>{>}。
【【 】】	第 1 話者の発話文が完結する前に、第 2 話者の発話により、結果的に第 1 話者の発話が終了したこと。

付表 (フィラー全体の使用の内訳)

	フィラーの形式	Cグループ					Jグループ					
		C1	C2	C3	C4	C5	J1	J2	J3	J4	J5	
		176	176	290	181	257	160	298	283	293	301	
日本語 フィラー	表現型	どのようにいいで	1	1								
		というか			1			1		3	2	
		何というか					2	1	1	2	1	
		っていうか						1		4	3	
		何っていうか							5		1	
		どういうか							1			
		何でしょうね									1	
		そうですネ						1	7	6	2	15
	合計	1	1	1		2	4	14	12	9	19	
	語彙型	んーと	1				1				1	
		えっ / ーと		2		1		16		11	1	3
		なんか	1			1		90	119	122	77	73
		まあ				2		35	22	114	12	54
		この	1	4	1	2			3			1
		その	10	4		11	11			5	5	36
それ			1								3	
あの(ー)			53	1	146	46		65	10	152	41	
あれ							68			1		
合計	13	64	2	163	58	141	277	262	252	208		
音声型	あ(ー)	2	2		1	13		1		1	6	
	え(ー)	1	4		8	5	11	3	6	9	57	
	ん(ー)	16	20	50	5	51	4	3	3	22	11	
	合計	19	26	50	14	69	15	7	9	32	74	
中国語 フィラー	e(ー)	95	75	232	4	119						
	eng(ー)	27	3	3		6						
	就是(jiù shì)	8	1	1		1						
	嗯(en)	4	5			2						
	那个(nà/nèi ge)	4	1									
	就(jiù)	4										
	那种(nà/nèi zhōng)	1										
	怎么说呢(zěn me shuō ne)			1								
合計	143	85	237	4	128							
異なり形式(28種類)		15	14	8	10	11	9	12	10	15	13	

(博士後期課程学生)

(2023年8月17日受付)

(2023年11月30日掲載決定)